しても出來ない事だと思ひましたでも彼等は雪國特有の炬燵にもぐり込んで溫良しく過してゐますそれは遠からぬ春の訪れを知つてゐるからでせう。暖い陽光に山麓の山櫻が咲き初めれば、こんなに多い雪もいつしか日陰に追やられ、そして所謂「岳」が懐しい男性的な肌を露はしてくる樣になると訪れる清々しい夏を待つてゐるからでせう。午前九時頃やゝ興奮を感じて羽毛の樣な降雪の中を出發しました。切久保の部落を經て、諏訪神社からラッセルをしなければなりませんでした。落合部落の分岐點から雪はます〳〵深くなつて來ました。しかし道は順調に進んで發電所小舍からシールを着けて數回のジグザグを繰返へすと落倉スキー小屋に着く事が出來ました。雪が深かつたので滑つてもあまり面白くなかつたが、寫眞等撮つてゐる間に忽に一時間は過ぎてしまひました。小屋にかへつて食事をしてゐると僕等が來たコースを三十餘人のパーティーが登つて來るのに氣がつきました。これは僕等より一汽車あとから來た、大鐵募集の團體だといふことはすぐわかりました。彼等もこゝで食事をするので混雜するから一足先に發たうと思ひましたが、栂池までのラッセルを考えたとき、それは彼等の後から行つた方が、どれ位樂か知れないと思つたので出發を遲らせました。

午頃雪は止みましたがどうも霽れさうもありません午後一時半彼等の出發を俟つて發ちました。三十餘人のあとからゆくのでラッセルには、すこしも勞力をつかはないで濟みました。落倉スキー小屋から約五十分のアルバイトを繼續すると御殿場につきます。この頃より又雪が降り初めました。それに時折身の切れさうな風が頰をうつてゆきました。こゝから神ノ田圃早大ヒュッテまでは鷄峰の山腹を尾根に沿ふてゆくのです平常ならば行手に迫る峻峰への激しい愛着を瞳にこめ突兀と削立する白馬の姿に魅せられるのですが、今日はそんなロマンチックには、當然考へられません。天氣は激變して吹雪となつたからです。

三時十五分に早大ヒュッテを通過して栂池ヒュッテ

一　嘉野草

雲　海

に向ひました。吹雪の度は益々猛烈になるばかりでした。勿論咫尺を辨ずる事は出來ません、氣溫は可成下降したらしいです。手足はすつかり感覺を失つてゐました。それは怖るべき凍傷の前兆なのですがどうすることも出來ません。一刻も早く、ヒュッテに着ふかと急ぎました。白樺と栂にぶつかる猛風の咆哮だけが耳に入るだけです。身體の調子を失ふまい努力しました苦痛の數時間を過して僅に屋根だけを出したヒュッテが寸前に表はれたときは、さすがに嬉しかつた。六尺の土臺の上に建てられた三階造の最新のヒュッテですが、雪面に露はれてゐるのは僅に屋根だけです。入口に達するには雪中深く作られた階段を一廻りしなければなりません。手袋をとるのに骨を折りました。靴はカチ〳〵ワインドヤツケは、バリ〳〵で、總てが冷く堅かつたが、無性鬚を生した山男は暖い心でベルグシュタイガーを歡迎してくれました。

このヒュッテで僕等のねたところは所謂屋根裏でしたが、天井は相當に高く感じが好いものでした。槍の殺生小屋の樣に狹苦しいものではありません。

このヒュッテの收容人員は百名とありますが、勿論冬期に於ける事で夏期に燕山莊とか、其の他シーズン中の「北」の山小屋の樣につめたならば三百人は優に泊れる事だらう、夏は風呂も沸くさうで夏道からも相當離れてゐるし、白馬の連峰も一望の裡にあるから、仰望する大日の鋭峰、白馬杓子の岩に激しい爭鬪の情熱をこめ、或は附近の宏大なる高原性にロマンチックな數夜を送るのもよいだらう殊に月の佳い晩に於て。

夜に入つても風は猛り狂つてゐましたが雪は止んだらしいので、ヒュッテの窓からのぞいて見ましたときそこに描き出されたもの何んと形容してよいか、それは現世界を離れたある神秘な世界、自分の夢想だにしてゐなかつた光景であつたのです、いつの間にか雲の切れた空に冷刄の如き滿月が天狗平から、ヒュッテへの尨大なスロープを照し出してゐたのです。銀の樣に磨かれた雪面に新雪は猛風の爲めに數知れない白髮の侏儒となつて大自然の奏でる偉大な曲に踊り狂ふ姿な

のでした。こゝホツホアルペンに於けるヒュツテの存在、それは渺茫たる極北の雪原に點描するエスキモーのそれよりか、微かなものであるかも知れない。その中で一介の人間が生けるが如き大自然の莊麗な動きに魅せられてゐたのです。樹を走る風の咆哮もいつしか山の呼ぶ聲となつて聞えて來ます。氷と雪の誘惑は自分をすつかり無我の境にひき入れてしまひました。

あのドロミテンの山村、モンテクリスタルの岩の山に、今猶傳はる青の光の傳說、あの滿月の夜、村の若者等が「青の光」に魅せられ何んの恐れ氣もなく岩を攀ぢて行つたのもこんな月、こんな誘惑ではなかつたのだらうか。それは戰慄さへ感じさせる程の出來事でした。

明日好天氣なるをひたすら祈つて萬年床にもぐり込んだのは、その後間もなくでした。

四月二日は五時半に目が覺めました、風の音に起されたのですが太陽は照り輝いてゐました。昨夜の感激的の出來事はリツプヴアン、ウインケルの物語の樣に消されてゐました。仰ぐ白馬の靈峰は峻嚴として蒼空に聳え、大日岳の鋭峰から尾を引く雪煙は何ものかを暗示し、今日の登攀に一抹の不安を與へてゐました。

この強風では頂上までは無理かも知れないが行けるところまで行つて見やうと午前七時十分にヒュツテを出發しました。四月には珍らしい粉雪です。ジグザグのシュプールを殘して、苦しい登行を約一時間續けると天狗原に出ました。風當りが猛烈です。ガイドのラツセルが雪煙で忽にして消されてしまひます。天狗平の祠に着いたのが八時十五分でした。わずかに岩が露出してゐるだけです。夏は相當に樹木の多い天狗平には、一本のそれさへ見る事が出來ません。一面の雪原と化してゐます。森上方面には、不氣味な雲が抱き合ひ、重り合つて丁度大洋の怒濤が崩れ落ちる瞬間に靜止した樣な格好をしてゐました。シーは一尺位もぐります。シールの利かないのをなげきながら更に乘鞍頂上への大斜面にジグザグを刻みました。氣が張つてゐるので、疲れもおぼへません。天狗平から一時間の

ジグザグを繰返すと乘鞍頂上に達しました。風當りが強いために雪面はクラストして居ります。こゝから白馬頂上までは未だ四時間はかゝるでせう。大きな雪庇の出てゐる大日岳の尾根が、馬尻の方に足を投げ出してゐました。こゝで一旦スキーをぬいで大日岳との鞍部へ下り始めました。純白の雷鳥が目前を悠々歩いてゐます。この強風にも頓着しない雄々しさです。

大池の南側に下りました。池はすつかり雪に埋れてゐました。こゝからスキーを穿きクラストをさけて約二千五百米邊まで行ましたが、それからはもう堅いクラストでスキーでは危險です。地圖の小蓮華から東へ第三番目の高點丁度夏道の記號のある邊をデポツトとしました。こゝから頂上までは絕對にアイゼンの領域です。十時二十分にデポツトを發ちました。足下に大所の谷を見て大日岳の手前の鞍部までトラバースして尾根に出れば、ところ〴〵夏道が指適されます。アイゼンを氣持よく利かせて午前十一時十五分大日岳の絕頂に立つ事が出來ました。白馬は目睫に聳えて居ます。氷風は凄く當ります。この風の爲めか猿倉方面の雲はすつかりなくなつてゐました。白馬との最低鞍部で東側に風をさけて食事をとりました。

晝食に握飯と砂糖餅を用意して來たのですが、握飯はとても喰べられたものではありません。それは丁度あられの樣に、眞白にそして堅く凍つてしまつたからです。砂糖餅は腹を滿すのに充分でした。冬期高峻山岳に砂糖餅は必ず携帶すべきです。凍ついた飯などはとても喰べられたものではないからです。大雪溪を足下に杓子から鎖のナイフエッヂを眺め零下數十度の雪嶺にレモンティーを飲むとき、それこそシュタイガーのみ知る美味と悅樂でありませう。鞍部から絕巓までは約二百五十米、約一時間の登行が必要です。尾根の東面は全部大きな雪庇を形成してゐました。

一歩々々と頂上に近づく氣持といふものはいつもながらなんと形容してよいかわからない位です。そして遂に午後〇時四十五分頂上に立つ事が出來ました。たゞ喜びと感激の交錯で心は一杯でした。

絶頂の展望、それは且て自分が恍惚とした燕槍の頂でのそれよりか又は武尊の山嶺に一夜をあかし、圖らずも接した曉の眺望より素晴らしいものだつたのです。氷雪に裝を凝した冬山の連互錯重峰々の特異な性狀が遺憾なく描出されてゐます。最もアトラクティブなピークはなんと云つても屹然と冲天を突く岩峰劍の姿でした。日本のマツテルホルン槍の姿も富士の麗容そして複雜なスカイラインを畫く八ツ岳も又は雪麗宏大な猫岳も、グロテスクに聳えてゐる戸隠も皆僕等のものだつたのです。黑部の溪谷は計り知れざる深さと恐しき誘惑とを以て沈默を守つてゐました。

富山平野も俯瞰する事が出來ました。能登半島が富山灣を抱いてその先端は模湖としてゐました。こゝで初めて日本海を眺める自分なのでした。

山頂の大觀の崇嚴さに二度と得難き數十分間を送り、午後一時十分に頂を去つたのでした。

ツアツケの利くのに委せて鞍部まではかけ下りました。

一時五十三分に大日岳を過ぎ二時四十分にデボツトに着きました。こゝからヒュツテまでに實に雄大無比の三大スロープが展開してゐます。即ち大池までの斜面と乘鞍から天狗原天狗原からヒュツテまでの斜面です。自分には少し急すぎるスロープでしたが、滑らなければならないので、度胸を据えてボーゲンを描き初めました。大鐵の團體も大池までは來たのでせう。無數のシュプールがはるか下に見えます。十數度のボーゲンの後に池を目がけて直滑降を飛ばしました。忽ちにして恐ろしい程のスピードとなります。スペースな洞穴の中にどん〳〵吸込まれてゆく樣な氣持です。恐ろしいと思つた瞬間はや二三廻轉して體は雪中深くもぐつてゐます目鏡なんかどこかへすつ飛んでしまひます

乘鞍から天狗原へも大傾斜面が展開して居ります。今朝にはあれ程良好であつた雪質も最惡のクラストに變つてゐました。バリ〳〵〳〵雪を破りながら滑るので脛が痛い位です。テクニックなんか全然使へません。轉ぶ事無數です。しまひには滑つてゐる方が多いんだ

か轉んでゐる方が多いんだかわからなくなつてしまひました。やつと小舍にかへつたのが四時半でした。

白馬から大日岳は一際巍然と聳えて居りました。

三日の日は風も治まつて薄曇りの天氣でした、僕等が起きたときは、大鐵の團體が歸路につくときでした。

僕等は別に急ぎもしないので附近のスロープに滑りにゆきました。クラストしてゐるので面白く滑れません。

午前十一時にヒュツテに別れを告げて神ノ田圃に向ひました。往路には難行したこのコースも、僅かに二十分で横飛に來てしまふ。この邊からは、雪質も所謂

ザラメ雪に變つてゐました。神ノ田圃から御殿場を經て落倉スキー場までは、半制動とボーゲンの連續です歸路に優秀なスキーを享樂出來るのも白馬の特長でありませう。

落倉のスキー場を二時に發つて森上へと最後のスロープを滑りました、勾配が緩やかなので制動を全然かけないで落倉の部落との分岐點まで來てしまひましたこゝでいよ〳〵スキーとも山ともお別れです。淡い惜別を感じました。

× × ×

その日の夕刻だん〳〵と離れゆく車窓から後立の連峰が夕空に沒するまで眺めてゐたのでした。

會　報

大會報告

第一回大會
高水三山ハイキング

阿久澤文雄

昭和八年十一月十九日（日）

往路　午前八時三十一分　新宿驛發
　　同　九時五十二分　軍畑驛着
歸路　午後五時十五分　御岳驛發
　　同　七時十分　新宿驛着　解散

参加者　三十三名（順不同敬稱略）

男子　高橋俊雄、山本德助、近藤藷三及令息、川島直、石田正、豊田一郎、村松瑛、木村登、平尾徹、加藤嘉明、今田敏男、渡邊安三、伊澤桂三郎、渡邊鐵次郎、草野嘉一高橋重吉、石川勝正、阿久澤文雄。

女子　古谷南枝、大仲啓子、菊池文子、野間恒子、針谷敏子井上一枝、鱒伴子、桑原トミ、肥沼月江、若林嘉子、榎本貞子、早川光子、葛貫常子、熱田喜久。

氣遣はれた夜來の豪雨も名殘なく晴れた十一月十九日（日）早朝新宿驛頭に集合した三十三名は先發隊、本隊の兩隊に分れ勇躍出發。立川で青梅電鐵に乘換へ登山口軍畑驛に下車したのが午前九時五十二分。驛前に勢揃して早速登山道を行く。

平溝川に沿ふて歩く間もなく大澤川との合流點に出て少憩。雷電山の禿山と武州御岳神社を祭る大嶽山を右と後に秋雨に洗ひ清められ、落葉に細められ、シツトリと落着いた山徑を辿り、「一杯清水」で少憩後杉の植林の間を縫ひ「見晴し」に出れば眼下に今迄歩いて來た平溝川の上流溪谷を隔てゝ右よりに惣岳山を望む。

軈て午前十一時五十五分高水山頂に着く。山頂には

波切不動堂を正面に右に高水山不動尊別當常福院、左に鐘樓がある。當不動尊は往時秩父庄司畠山重忠歸依頗る厚く、祈願により數度の戰勝を得たと云ふ傳說がある。御堂背面の大額は明治十八年甲源一刀流の奉納額で、それに島田虎之助の名を見出す時小說「大菩薩峠」を讀んだ人は、中里介山氏の名筆により浮彫にされてゐる上野鷲谷に於ける息詰まる樣な凄愴な場面を直ちに想ひ出すであらう。

高水山頂は老樹枝を交へて廣い展望はないけれども、多摩川方面は稍開けて大嶽山、御前山等と武藏野の方面及び大菩薩の方面が望まれる。此の「見晴臺」で先發隊の大努力よりなる飯盒飯と、佃煮、牛罐、お新香等で美味しい午食をし紀念撮影をする。此より先發隊と本隊は行を共にする。

高水山に別れを告げ不動堂の背後を通り拔けて木立の中を少し行けば明るくて快よい茅戸の一筋道、名栗川方面の眺望に勝れた山稜に出る。目の前に丸い頭をもちあげてゐる岩茸石山へは登行希望者のみ行く事にして、行かない者は左の山腹を絡んで密林を拔けて行く。岩茸石山とは其の南面にある岩茸石と呼ぶ岩壁に因んだ二俣尾方面に於ける稱呼である。此の岩壁に岩茸をあさつたが遂に獲られなかつた。又、西麓大丹波部落に於ては鷹之巢山と呼ばれてゐる。よく晴れた日には山頂より淺間、赤城、日光方面迄望められると云はれるが、殘念ながら今日は茅戸の圓頂を以つて知られてゐる棒の嶺及び川乘山一帶を指呼の內に望んで滿足するより仕方がなかつた。

頂上から南方へ踏跡を辿つて下り山腹の縱走路で全員合流し、心持ち細くなつた尾根の疎林を分け左に大澤右に大丹波の溪谷を瞰下ろしながら漸く杉や檜の植林が深くなつた山路を何時の間にか馬佛山を通りすぎて行くと眼前にぐんと高く惣岳山が聳えてゐる。岩塊を交へた電光形の急坂を喘ぎながら登りつめると惣岳山絕頂の鄕社青渭(アヲヰ)神社の背後に出た。

頂上は巨杉に圍まれ薄暗く深沈とした境域、社祠は小さなもので勿論無人である。社前で少憩、全員紀念

撮影の後、祠の背後のうちひらけた所から多摩川兩岸に連互する山々を眺め降路につく。

鳥居を拔けて非常によい路を急に下つて行くと路傍に淸冽な泉を湛へた、淺い、小さな、苔蒸した井戸がある。井戸の上に祀つてある眞名井大神の祠前に柄杓や茶呑茶碗が置かれてあつた。少し行くと針葉樹林を出外れて、迎もよく滑る赤土の九十九折路に疲れた足を踏みしめ踏みしめ歩きながらも、遠く、遙かに、夕靄の中に霞む大菩薩連嶺を飽かず眺める。やがて靑梅街道丹縄に降り午後四時半、武州御岳驛前着。

驛前射山溪の景勝に玉を轉ばせてゐる多摩の淸流に、愉快だつた一日の汗を拭ひ、茶亭の澁茶に渴を醫し、一行中一人も事故の無かつた事を幸福に思ひながら車中の人となる。

第二回大會

霧ケ峯スキー行

阿久澤文雄

昭和九年二月十日夜出發
同　十一日夜歸京

二月十日　午後十時四十分　新宿驛發
同　十一日　午前四時五十三分　上諏訪驛着
同　八時五分　ゲレンデ着
同　八時四十五分　同　發
同　九時四十分　カボツチヨ小屋
同　十時五十分　車山頂上着
同　十一時七分　同　發
午後零時三十五分　ヒユツテ着
同　一時十分　ゲレンデ着
同　三時八分　同　發
同　四時二十分　上諏訪驛着
同　五時二分　同　發
同　十時五分　新宿驛着　解散

参加者　十一名（順不同）

蘆田金之助、村松瑛、川島直、東三男、若栄三雄、
帆波幸三郎、草野嘉一、高橋重吉、石川勝正、伊澤桂三郎、
阿久澤文雄。

新興スキー場霧ケ峯行のスキー客を滿載した列車、網棚の上はスキー、シュトツク、リュツクサツクが今にもこぼれ落ちそうにグラ〳〵搖れてゐる。車内は紫煙蒙々、思ひは最早雪白の高原にとんで寢る人とてはない。互に雪の想ひ出を語り合ひ、明日雪原に如何なるシュプールを畫かんかと若人の胸の血汐は高鳴り、燃えてゐるのだ。車窓に映る嚴冬のキラ〳〵輝く星光は明日の快晴を約束して呉れる。

甲府、韮崎、富士見の各驛の呼び聲、もかすかに耳邊をかすめて茅野を過ぎ薄明の上諏訪驛に降り立つ。

直ちに上諏訪體育協會紹介の驛前湖月館の二階八疊に炬燵を圍んで陣取り、體育協會より派遣のコオチヤア濱氏を迎へ朝食を濟ます。

旅館前よりハイヤアに分乘、科ノ木迄行き、それよりゲレンデへリュツクを背負ひ、スキー、シュトツクを肩に擔いで相當な傾斜を、ザク〳〵と睡眠不足の體も前夜來の期待を鼻先に迎へて元氣よく登る。軈てゲレンデの一隅に立つた時、涯なく廣がる茫々たる霧ケ峯の大雪原に思はずシュトツクを高く擧げてシー・ハイル!!!

同行者中三名はテクニツク練習にゲレンデに殘り、他は車山登行に向ふ。

コオチヤアの説明によると普通のコースは澤沿ひに樂に車山の下に行くのだが、吾々はこのトリツプをより興味あるものにすべく右手の四つの小峯に小さな登行、滑降を樂しみつゝ行く。軈てカボツチヨ小屋に着き、小屋前にて始めてシールを着ける。それよりは全く直線的に數突起を越えて、車山一、九二五米突の三角點に達した。

山頂の强風は素晴しく、雪面はガリ〳〵にクラストしてゐる。凄烈な寒風に一時もぢつとしてゐられない。指先はすぐ痛くなるので始終こすり合せてゐる。足踏

してゐる。そして誰でもが上半身を前に折つて少しでも寒氣から逃れ様としてゐる。

乍然、その眺望の雄大さよ。南西方に木曾駒ケ嶽の豪邁なる山容、南東方に南アルプスの仙丈ケ嶽、甲斐駒、鳳凰三山の白皚々たる鋭い起伏、東方すぐ近く八子ケ峯に連り蓼科山の楚々たる優姿、折柄山頂を密雲に閉された八ケ嶽と鳳凰三山の間に遠く甲府盆地を隔てゝ、秀峰富士の麗容はクツキリと蒼穹に浮び、頭を東北方に廻らせば淺間、四阿の連山は何れも白銀を鎧ふて延々連聳し、氷雪の世界は際涯がない。只北アルプスは雲に閉され雄姿に接し得られなかつたのが殘念だつた。

飽く事なき大展望ながら、餘りの寒氣に、山頂に留まる事十數分、尻尾を捲いて早々降路に着く。全くエツヂのきかない、基部に大岩石の突出してゐる急斜面を目茶に降り、後は平坦なルートを盛に漕いで霧ケ峯ヒユツテのゲレンデに着く。グライダア小屋傍に少憩して、持參のパンとテルモスの熱いレモンティにすつかり元氣を回復し、ヒユツテを訪れゲロツ原（蛙原）の素晴しいスロープを一氣に壯快な直滑降、全く別世界の様に無風のゲレンデに歸着した。

ゲレンデに殘つてゐた三名と共に茶屋にて晝食後、各自氣の向くまゝに、附近のスロープに得意のシュプールを畫き、科ノ木迄最後の滑降を樂しみ、此處よりハイヤアに分乘上諏訪町に下山し、豊かなりし一日のスキー・ツアーに充ち足りた心を持つて午後五時二分發列車にて歸京す。

シーハイル

第三回大會
大嶽山集中登山

阿久澤文雄

昭和九年三月二十五日（日）
第一班　神戸より
第二班　茅倉尾根より
第三班　大嶽澤より
第四班　吉野梅林より

第五班　海澤川より
第六班　大澤川より
參加者　二十七名（各班提出記錄參照）

元來、集中登山なる登山形式は、一定の山岳に對して數個のパアテイが各異つた登路より得た山行の結果を集約して、各コースの地質、雪質、氣温、濕度等を比較研究する目的を以てR・C・C（大阪ロック、クライミング、クラブ）により提唱されたものであつた。

勿論山岳に對するかゝる科學的研究は必要なものであり、その山岳に對する眞摯な態度は全く尊敬するに足るものであるが、吾が部の企圖は科學的研究よりも寧ろ人類の心深く根ざした山の歡び、即ち、各パアテイが溪流のリズミカルなせゝらぎに、愛すべき小鳥の囀りに、或は又、のんびりした尾根歩きに、自然の懷に抱かれながら各コースを征服し、且、大岳山頂に豫定した午後二時から三時迄に相會し、互に手を握り合つてベルグハイルを叫ぶ時の歡びを期したものであつた。

各コースの記錄其他は各班報告に讓つて、各パアテイ共豫定時刻に無事大岳山頂に相會し、千代田生命體育會山岳部の爲め大いに氣を吐き、コツヘルで紅茶を沸かし渇を醫す。

關東一の好展望臺大岳山頂も春霞のため、遠山の眺望を得られなかつたが、漸く凜烈な冬より解放され、綠の春衣を山肌に着け初めて、柔らかな丸味のある山々のたゝずまいは陽春三月のポカ／＼と暖かい陽光に何時か登山者を夢幻の境に誘つて行く。

南方武藏野の大平原、八王子に漸く盡きて小佛峠、高尾山一帶に最初の隆起を見せ、北に連つて景信山、陣馬峰、の武相國境の尾根は、甲武、相三國々境の相會する最高の峰三國山（生藤山）となりそれより三頭山に連なる一聯の起伏は何れも指呼の間に横はり、その後には丹澤山塊、道志山塊が夢の國の山の樣に春霞にぼかされて影の樣に浮んでゐる。

西には多摩川、秋川、兩溪谷の分水嶺をなす尾根筋に鋸山が突兀と聳ち、その後には山容尨大な三頭山がどつしりと根をかまへてゐる。北に多摩溪谷を隔てゝ

棒ノ嶺、川苔、六ツ石の山々がそれと指され、背後にある山々は宛も海邊に大洋の波濤を望んだ樣に千波萬波、一高一底、遙かの末は空に溶け込んでゐる。

午後三時少しすぎ山頂を辭し下山の途につく。途中櫛眞知命、大巳貴命、少彦名命を祭神とする府社御岳神社に參詣し、立派な杉並木の間を羊腸とうねる坦々たる賽路を降り禊瀧の瀧茶屋附近で少憩、あと僅かの路を射山溪に出で、去年十一月第一回大會高水三山ハイキングの時憩ふた同じ茶亭の澁茶に喉をうるほし、愉快なりし一日の山行に滿足を覺えつゝ青梅電鐵にて歸京す。

第一班神戸より

石川勝正

五日市驛着　午前　八時十三分
十里木着　同　八時三十五分
本宿着　同　九時三十分
大澤着　同　十時三十分
神戸岩着　同　十一時十五分
同　發　午後十二時三十分
トバ中岩着　同　二時二十分
大嶽小屋着　同　二時五十分
參加者　鈴木長太郎、淺田信次郎、肥沼月江、若林嘉子、大仲啓子。
係　石川勝正。

十里木の部落をあとに坦々たる秋川の街道をすゝむ。三月の陽はぽかぽかと輝り輝き、心持良く汗をかく。小鳥の鳴音はいと爽かに、馬頭刈の頭は碧空に白く光つてゐる。秋川の溪は青々と淵を或は瀨を作つて樵夫は岩角にたち嶌口で材木を一本一本順序よくすうすうと流してゐる。

元郷、本宿と平和な村を過ぎ西川橋に至れば前面に巍然と聳ゆる、鷹黑の岩峯、その横に一狀の白布を敷けるが如き天狗瀧がとうとうと落ちてゐる。

此の邊より溪谷も次第に廣まり奇岩塊石はなくなり廣い澤となり路はそれに沿ふて何處までもつゞく。我

等一行六人は歌を口すさみながら、煙草をくゆらしてぶらんぶらんと、或は路邊の豚小屋をのぞひて吼へられたり朗らかに歩をはこぶ。

梅の花咲く中里を見送り大澤橋で第一回の休憩を取る。此處で小留浦に越す里道と別れ道を右に取り神戸川を溯る。間もなく神戸の部落だ。神戸を過れば部落は一軒もない、山は次第に狹て來たが澤は以前として廣く明るい。「此の附近で月明の夜テントですごしたら」と思ひながら幾つかの小橋を渡ると幸にも村人に出會した。神戸岩の少し先に立派な道標が立つてゐるそうな。

ものの十分も歩まぬ内、目前にぐうつと聳え立つ岩、戸岩だ。高さが四五十米も有らうと思はれる削壁に狹められ其の間に棧橋がかかつてゐる。すうと凉風が顏をなぜる洞穴の樣な感じだ。棧橋の下には神戸の本流が渾となり藍を湛え、或は瀧となつて散る岩壁の割目には樹木が繁り、山藤がたれて、仲々見事な岩だ。

此處でのびる事一時間、晝食も終り、最後の登行にかゝる。道は神戸岩上流約二百米附近の第一の澤沿ひについてゐた。杉の植林をぬつて行けば小さな小屋に出會ひ澤は二分する右の澤は大岳の西南面で相當の傾斜を以て迫てゐる。道標に從つて路を左に取る。

陽はかんかん背を照りつけとても熱い。汗ばんだ体、一歩一歩しつかり大地を踏みつけ無言で登る。立止つて振返れば淺間尾根の草原と三國の山脈が遠くかすんでゐる。憶ひ出深い陣場がかすかに姿を見せてゐる。

時計は二時を廻つた。皆もさぞ待つて居る事だらう。「ヤッホー、ヤッホー」と盛んに呼びかけたけれど谷間に木魂するばかり。鋸の尾根も間近らしい。枝尾根に出て一休みする。近邊は靜まり返つて物音一つしない。時々風に流されて瀨音が聞ゆるばかり、陽炎は枯草に萠え心持よき風は汗をぬぐひ去る。

下の方は小留浦越の里道が白く見える。大岳の峯と御前山は目の前にその後に三頭がねむそうに座つてゐる。大平の横に七つ岩のなだらかな尾根が延びてゐた。

再び急な登行を續ける。道は良いが靴が滑て歩きづらい。大岳から「ヤッホーヤッホー」と響いて來る樣な氣がする、こつちでも「ヤッホーヤッホー」とやりかえすが聞えぬらしい。それから間もなく鋸尾根に出て今ちやん達に迎えられ神社についたのはかれこれ三時に近かつた。

第二班茅倉尾根より

伊澤桂三郎

五日市着	午前八時十三分	
十里木着	同	八時三十分
高明山頂着	同	十時十分
馬頭刈山頂着	同	十時二十七分
同 發	同	十時十五分
ツバラ岩着	同	十一時五十三分
大獄小屋着	午後	一時二十五分

參加者　相川福正、村松新八郎、宮氏保、青木茂。

係　伊澤桂三郎。

山小屋の曉方は肌寒い、五時みんな一緒に飛起ると各自の職場を受持つて騷々しく賑やかな朝食の準備だ。一通り食事も終つて晝の兵糧をつくる。あとは小屋内の整理一宿の義理により塵一つ殘さない樣に片付ける。八時に本隊が到着するのでその前に自動車の用意をして驛まで出迎へに行く。同宿の清水、柴山兩君は大獄澤から海澤へのコースをとるので一足先に出た。

八時十三分第一班、第三班が到着、ハイヤーに分乘して十里木へ向ふ。落合、寺岡、軍道の部落を通つて愈々登り、それもグン〳〵登る。高明山までの登りそれに眺望も全然ないのでひたすら登つた。

十時十分頂上の神社へ着く。これでホツとしたあとはラクダの背中を歩く樣に一上一下だからのんびりもする。

僕の班は御婦人禁制なので遠慮なく裸の行進だ。ボカ〳〵する日差しを浴びて歌なぞ歌ひながら又一寸でも草地でもあると寢轉がつて一服とくる。

始終大岳を右に見て最後の突起まで來ると前方に懸命

に尾根へとつついてるパーティ、大嶽澤組に先を越されてしまつた。これからは大嶽小屋までは間近いので裸では失禮とみんな禮裝して行く。小屋の半丁程手前左側から突然第六班と出會ふ。

大嶽小屋へ着いたのが午後一時二十五分だつた。

第三班大嶽澤より

草野嘉一

五日市驛着　午前八時十三分
上養澤着　同　八時五十五分
大瀧着　同　十時〇分
同　發　同　十一時三十分
尾根着（大岳澤を詰めて馬頭刈尾根の岩場の前）
午後十二時四十分
大嶽小屋着　同　一時十分
參加者　針谷敏子、芽米ヤスヱ、松野萬里、菊池文子、高橋辰。
係　草野嘉一。

女ばかりの同行を考へて頼んだ五日市驛からのハイヤーを乘捨てたのが大嶽澤と上養澤との出合、八時五十五分だつた。神社の手前を左へ割合に開けた明るい大嶽澤を材木運搬道に沿ふて、時間に余裕のあるのに任せて自分達の立つ位置を根氣よくしらべながら、のんびりと歩いて行く。未だ巣立ちして幾らも經たない樣な山鶯の音がそこゝに聽かれる。只長閑な澤歩きと言ふより外はない。北方神鷹岩から發する澤の蔭にかゝる小さな瀧のある處に來ると、今迄開けて居た谷は急に暗くなり、兩側から押迫つた苔付の岩間を吹く風は冷かに膚を撫でゝ心持よい事限りがない。奥深い溪谷美を背景にして紀念の寫眞を撮る。これも束の間、ほんの五六分經つと谷は元の平凡さに還る。歩む事十數丁、大瀧に出る。丁度十時、早過ぎるとは思ふけれ共、是から先に澤のない事を思ふと此處で晝食をとるのが最も安全である。

勢よく落下する大瀧を眼前にして谷に降り立ち、各自腕に自慢の御馳走をひろげる。驛で買つたサンドウイツチを食べる自分とは雲泥の違ひである。けれ共場

所は大嶽山を背景にした大瀧の瀧側、たとへ佳肴珍味はなく共自然の懐に抱かれて口にする粗食こそ王侯貴人のそれにも優るものがある。遊ぶ事一時間半、重くなつた尻を持上げたのが丁度十一時半であつた。

大瀧を左に卷いて大嶽澤をつめて行く。今迄と違つて澤は急になつて來る。澤のつまる處、右に大嶽山頂の巍然として聳えるのを初めて見るあたりに炭燒小屋がある。其の小屋からは道もない。止むを得ず馬頭刈尾根に向つて直登行を開始する。今迄のノンビリし過ぎた澤歩きとは、てんで比較にもならない急坂を息を切らしながら、がんばる事一時間餘、やつとの事で馬頭刈の尾根に出る。

霞がかゝつて居るとは言へ展望は素晴らしい。ゆるやかに延びた杉と萱戸の馬頭刈尾根、秋川を峽んで對峙する刈寄、臼杵、生藤の連山、ハイキングになじみ深い高水三山、秩父連山と一望の下に開けた展望は喘ぎに喘いだ後だけに身にしみて嬉しい。見透しのきかない澤歩きから、一望千里の尾根に出た時程嬉しい山行は又とあるまい。

休息十分にして頂上を目指して歩を移し、大嶽の三角點に達して、先着の第五班と快哉を叫んだのは一時を過ぎる十分であつた。

第四班吉野梅林より

渡邊安三

樂々園着　午前九時〇五分
登り口着　同　九時三十分
岩ノ宮着　同　十時〇分
分岐點着　同　十一時十分
御岳山着　同　十一時四十分
大嶽小屋　午後零時十五分
係　渡邊安三。

九時に日向和田に着いた。それから橋を渡つて、道を尋ねて、貧乏山なら此の道を行けばいゝと敎へられた。日の出山の事を貧乏山と呼ぶのである。散りかゝつた梅園を通り過ぎて、六百米程の所の岩をめがけて

登りだした。ハイキングにはもつてこいの場所であつて道もいゝ、岩の上からは眺望が良く多摩川と梅が良く見えた尾根をはすさすどこまでも道のとほりに行くと六四六米の突起に出た。こゝから尾根筋は眺めが良く御岳まで、のんびりした。

御岳に十一時に着いた。奥の院から頂上まで十二時少し前であつた。此のコースはハイキングとして申分ないものである。

尾根着　午後十二時十分
頂上着　同　十二時一五分
參加者　堀貞一、今田敏男、蘆田金之助。
係　高橋重吉。

前日東京を出發した我々四人は氷川の宿に快い一夜を過し、爽やかな朝の冷氣をひえ〴〵と感じ乍ら多摩川對岸の小徑を海澤へと向ふ。

數日の晴天つゞきに流れの涸れるを氣遣ひ一附橋の河原で水筒を滿す。だが今日の行程には幸ひな事だ。徒渉をせずに濟む。材木を運ぶ荷車を通はせる爲作つたのであらう一間程の坦々たる道が川沿ひにつゞく、此道はしばらくして川から離れてしまふので河原に降る。

河原が淵となる處から、散在する岩を巧みに利用して出來て居る棧橋を進む。やがて路は右岸の山腹を搦み天地澤の出合を過ぎる事しばしにして再び河原に降る、少し行くと左岸に瀧がかゝつて居る。

此の直ぐ上には石垣を澤一杯に圍らして其の中央部

第五班海澤川より

高橋重吉

氷川發　午前六時三十分
海澤出合着　同　六時五十五分
一附橋着　同　七時〇五分
天地澤出合着　同　八時十分
三ッ釜瀧着　同　九時十五分
大瀧着　同　九時三十分
伐材小屋着　同　九時五十五分

を四角に切り拔いた堰がある。

此石垣を登ると廣い河原に出、左右にガレが見えたりしてひらけてしまふ。岩に腰をおろして冬眠から覺めた蛙の戯むるに興じ乍らしばらく休憩する。

兩岸がせばまつた處で本澤は三段になつた立派な瀧となつて落ちて居る。傍の樹に三ツ釜の瀧と書いた札がぶら下つてあつた。

路は左の枝澤に少し入つてから右手にヂグザクに上つて本澤右岸の山腹を搦んで居る。ネジレ瀧は此下にあるのだが割愛してしまふ。路が澤へ降ると大瀧の下に出る。名の如く海澤では一番大きい瀧だ。

左岸の尾根を卷いて中腹の林道を少し行くと伐材小屋に出る。內を覗いたが眞暗で誰も居なかつた。

此處で紅茶を沸かしたりして一時間ばかりのびてしまふ。其中に此小屋の若者が二人晝飯を食べに歸つて來て何かと話しかける。路がわからないと言つて此處から引返へした登山者がありましたよと笑つて居た。

我々も其の二の舞を踏まぬ樣よく路を聞いて出發する。三段のワサビ畑の上段の裾を卷いて若宮澤とフナクボ澤の中間の尾根を登る。藪はまばらでたいした苦勞なく大岳から鋸への尾根に出る。それから約五分の後大岳山三角點に達した。まだ他のどのパーテーも來て居ない。

リュツクからおもむろに握飯を取り出して晝飯にとりかゝつた。

第六班大澤川より

阿久澤文雄

御岳驛着　午前七時二十五分
小留浦着　同　八時〇五分
多摩川、大澤川合流點　八時五十五分
大澤峠着　同　十時五十分
鋸山肩着　同　十一時二十分
同　發　午後　齡時二十分
大嶽小屋着　同　一時十五分

参加者　山本德助、時任義隆、阿部俊一、松本進三。
係　　阿久澤文雄。

御岳驛より直にハイヤアに乘り氷川に赴く、鳩の巣の景勝を車窓より眺める。多摩溪谷は此の所兩岸相迫り、巨大な岸壁に水路を極端にせばめられた水は白沫をあげて奔流してゐる。運轉手の話によればその昔江戸に大火のあつた時上流から伐り出した材木が此處で流下を妨げられ山と積まれたとの事、又鳩が此の近傍へ巣を作つたので鳩の巣の名があるのだそうだ。軈て數馬の石門をぬけて氷川へ着く。

さて氷川に着いた吾々は今日の登り口、多摩川、大澤川合流點へ向つて歩き出した。多摩川沿ひの新道を進みやがて對岸に這ひ登り、少し歩いたがどうも變なので村の娘さんに訊ねたら此處は檜村境だと云ふ。驚いて早速引き返した。結局ハイヤアを下りたのが小留浦で、大澤川へ入るのはそこから半町程先の處だつた。運轉手の親切で氷川を通り越して小留浦迄來て呉れたのはありがたいが、下りる時氷川です。鋸山はもう少し先からですと云ふたが、もう少し先にはちがひないが、下りたのは氷川だと思ふて行つたのがわるかつた。結局運轉手の親切を恨んでしまつた。

大澤川沿ひの道は立派なものであつた。今日のコースは樂なのでゆつくり雜談しながら歩き、時時澤の邊に休憩しパンなどを喰ふ。リュツクは二つなので輕いものながら互に代り合つて背負つて行く。やがて澤も最後迄登りつめたので水筒に水を入れて少し登ると、地圖で七〇〇米の等高線と小徑線との交點へ出た。左側に大澤小屋がある。

屋根もしつかりしてゐるし床も、丈夫だから充分宿泊に足りる。只水が小屋のすぐそばにないのが不便だが一町も下ればあるのだから、大岳、三頭の尾根傳ひにゆつくり歩かうなどゝ云ふ時には役に立つだらう。此處から急登路を登りつめて多摩川、秋川の分水嶺大嶽、御前の縱走路に出る。鋸山の肩を通る道が割岩附近に來た時、腰をおちつけてゆつくり晝食を攝る。水筒の水で紅茶を沸かし、又綠茶を煮る。山で飲む茶は

何時もの事ながら實にうまい。殊に水筒の限られた水で沸かした茶のうまさ。

晝食後、右に秋川の谷を見下ろし、遠く、三頭山より陳馬、景信に至る尾根を、左に多摩川を越へて、六つ石、川苔、高水三山の連脈を木立をすかして眺めながらのんびりと歩く。大岳山肩で第二班のパアテイに遇ふ。大嶽小屋へリュツクを置いてすぐ山頂へ登る。第三、第四、第五、各班既に山頂にあり、互にベルグバイルを叫ぶ。

第一回　飯盒祭（於三峠山）

昭和九年五月二十七日
参加者　渡邊安三、淺田信次郎、石川勝正、高橋重吉。

午前二時自動車を小沼に捨てる。十四夜の月は既に沒し素晴らしい星夜だ。木下闇をラテルネのほのかな光りで照らし乍ら登り初める。約三時間の後頂上の茶店でバラ色に彩られた富士の麗姿、殘雪豊かな南アルプス、鋸齒狀の八ケ岳の岩峰、遠く夢のやうに浮んで居る北アルプスの諸峯を飽かず眺め入つて居た。

飯盒炊爨の後ザイルを肩に輕い興奮を感じながら岩場へ、午前七時より午後四時迄登攀三回下降一回外懸垂の練習を行ふ。壁、チムニー、クラツク、棚凹角等種々の岩狀を有する此のゲレンデは我々の岩登の技術の進歩に對して大いに得るところがあつた。

歸路は母の白瀧を經、川口村に出、渡船で船津へ、船が湖心に進むに從ひ、富士は裾野を長く引いて目前に大きく迫つて來た。

例會報告

第一回　赤城スキー行

一月二十七・八日　月光に輝く白雪にスキーを滑らし赤城神社の傍なる猪谷旅館に着いたのは八時近くであつた。

翌早朝準備をとゝのへ黒檜へと向ふ。約五時間のアルバイトの後、頂上の霧氷に埋もれる社の前に立つ事が出來た。先づテルモスのレモンテイーに元氣恢復、周圍の壯大な眺望をほしいまゝにした後、輪カンに任せて飛降りる樣に一氣に馳け降る。

歸路、箕輪までは絶好のコンデイションにスキーは矢の樣に飛び幾度轉倒したことか。惠まれた一日のスキー行に何ものにか感謝したい樣な氣持がする。

【附記】黒檜はスキーで登るべき山ではない。冬の黒檜に登るならば輪カンのみにてやればより効果的に、より愉快に一日を過す事が出來るであらう。

時間記錄

二十七日　上野發　午後一・五五　前橋着　四・四〇
四・五五　バスにて箕輪　六・〇〇　猪谷旅館　七・四〇
二十八日　旅館發午前八・三五　スキーデポ　一一・三〇
—一一・五五　黒檜頂上　午後一・一八—一・三五　デポ
二・一〇　旅館　二・三〇—四・二〇　箕輪　五・二五—
六・三五　バス　前橋　六・三〇—七・五九
上野　一一・〇〇

參加者　草野嘉一、高橋重吉。

第二回　陣馬山スキー行

節分の前日、思ひがけぬ雪に惠まれたので支度をとゝのへ土曜日より石川、伊澤兩君先發としてスキー登山を決行した。

二月四日　薄明に起きて一番に乘り八時與瀨驛着、白雪を踏み一月にとつた路を逆に一氣に山頂までのす筈であつた。しかし積雪量多くスキーを穿くに路は狹く止むを得ず徒歩するけれどラツセルは前日出發の兩君が確實になしてくれた爲容易く大平に九時に着く。

富士を初め、前衞の大室、御正體、加入道、丹澤、小金澤が各々積雪に衣粧をこらし空は紺碧のそれよりか蒼く加ふるに南側に於て三〇センチの積雪量なる故北側の積雪量を想像して胸の躍るを禁じ得なかつた。

明王峠までヂグザグ、汗を流してかつき上ぐれば陣馬山頂に人無く一筋のシュプールのみ尾根を乘り越え林の彼方に消え去つて居る。十一時四十五分先發隊と頂上にてシーハイルを交はす。直ぐリュツクを置いて北側の斜面を滑る。五〇センチの積雪でカヤを刈つてあるので愉快な滑降が得られた。

歸路は和田部落に出、上野原に着く豫定で三時まで思ふ存分滑る。陣馬より和田峠の鞍部まではスキーは困難、峠よりの滑降は面白かつた處々雪のまばらな所もあるが、和田部落まで滑れる。和田部落より上野原への街道も素晴らしい滑降路だつた。スキーをつけたりかついだりしたが星が見え出したので遂に斷念した。上野原驛までの路は登りであつて疲れてゐる故か、とても長く且苦痛を感じた。　（渡邊記）

時間記錄

新宿發　午前六・二〇　與瀨驛着　七・五〇
大平着　九、〇〇　明王峠　一〇・一〇
陣馬山頂　一一・四五—午後三・四〇　和田部落　五・〇〇
上野原驛　六・五〇

參加者　伊澤桂三郎、石川勝正、朝賀義雄、淺田信次郎、渡邊安三。

第三回　愛鷹火山群縱走

四月一日　低山にして高度僅かに千五百米突程度なれど森林深く、一部に於て興味ある岩場の難所等あり。

松永敏男君（靜岡商業）の遭難も記憶される。愛鷹山に冬登山するなら確かに危險性はある。積雪の三枚齒等小さな岩ながらも岩登りの眞似事が出來る。右の谷は熊谷噴火口、左手は松永澤斷崖五〇〇米突にも及ぶものすごい谷である。

全體を通じて最近は縱走路として越前岳より愛鷹山に至るまで立派な路が開けてゐる。

危險個所、積雪の三枚齒、親不知、馬場平（霧に卷かれると道を探すのに骨が折れる事ならん。背丈もある笹の密生地）。

時間記錄

須山村出發　六・一五　大澤出合　七・〇〇　惡澤ガレ　九・一〇　富士見臺　九・三〇　越前岳頂　九・五〇　呼子岳頂上　一一・〇〇　蓬萊山頂上　一一・二〇　鋸三枚齒　一一・三〇　三枚齒越え約一時間　親不知　〇・三〇　位牌岳頂上　二・四〇　馬場平　四・〇七　愛鷹山頂上　四・四〇—五・四〇　青野村　八・三〇

參加者　宮氏保、淸水敎。

第四回　小金澤連嶺

係都合により中止

第五回　川苔谷

係都合により中止

第六回　谷川岳

五月二、三日　夜中ふと眼がさめる。豫想通り雨。晴天ならば三時出發の筈の一ノ倉澤組も斷念してか良く寢てゐる。夜の明けるを待つて外へ出る。雨は小降りとなつたけど雲は低く垂れこめて動こうともせず、どう考へても晴れさうな氣配は見えなかつた。

手早く仕度をして山ノ家を出たのが五時半、一ノ倉澤組はマチガ澤に變更して湯檜曾川の對岸で別れる。トンネル上のゲレンデを突切つて愈々西黑澤へ入る。

驚いたことにはこの入口から殘雪を踏む。昨年は瀧から一寸程上でないと見られなかつた雪がこんな下まで來てゐる。水量も三倍强增加、膝までの渡渉二回で蛇門瀧へ着く。雨は止んだがガスは間斷なく襲つてくる。

この澤は瀧までは暗い澤だが瀧を越すと急に谷が廣くなりのんびりもする。本澤と割澤の出合邊でゾンメルシーを樂しむ。綠が雨でめざめる樣に爽やかで嬉しかつた。割澤は一面の雪溪となり夏路はなくアイゼンとピツケルでこの急傾斜を登る。マチガ澤との尾根へ出る。上州側に並ぶ大きな雪庇が出てる。ガスは次第に濃くなつて來、雨は烈しく背まで通し雪と岩との連續を緊張して登る。頂上へあと五分位の個所で上からヤツホーを聞く、ウインドヤツケに身を固めた高橋石川二君の先導で頂へ着いたのが十時四十分だつた。

時間記錄　山ノ家出發　午前五・三〇　西黑澤入口　五・四〇　蛇門瀧　六・二〇　マチガ澤との尾根　九・一〇　谷川岳頂上　一〇・四〇

參加者　畑山、帆波、淺田、伊澤。

第七回　マチガ澤登攀

五月三日　夜半からの雨に殘念乍ら一ノ倉澤登攀は斷念する。濡れた岩等到底登るべくもない。ルートをマチガ澤に選び谷川岳頂きを目指すことにする。マチガ澤は以前二回志したが一回は吹雪激しく途中で引返し、他は其年初めての新雪にスキーを持たないので中止してしまつたことがあるのだ。

湯檜曾川に懸る橋を渡つて、西黑澤から登る伊澤、淺田、帆波、畑山の四君と別れ、湯檜曾川沿ひの路を約三十分でマチガ澤出合に出る。其處からゴロ〳〵した石傳ひに十分も登るともう一面の雪溪である。早速アイゼンをつける。

左岸から左に雪溪を横切らうとした時二人の體重に耐えられなかつた爲だらう、不氣味なゴーといふ音がしたと思ふと二間四方ばかり大きな龜裂を生じ私の立つ居た所は雪橋が落ちて流れに落ちこんでしまつた。幸ひ水量が少かつたので靴を濡らしたゞけで事なく濟

んだ、一ノ倉側の尖峯シンセンが目と同じ高さ位になる處まで登ると、後は深い霧の中でさっぱり見當がつかない。時々大きなクレバスが深い割目を以て我々の行手を遮ぎる。斜面の角度は次第に鋭くなりアイゼンのツアツケだけでは不安を感じ一歩々々足場を切つて登る。

「あの岩蔭で休まう」とその岩まで行くと直ぐ目の前七八間の處は尾根ではないか…最後のクレバスをステツプを切り、ピツケルを打ちこんで越える。クレバスの底には水が音を立てゝ流れて居る。あまり氣持の良いものではない。尾根へ出ると谷川岳の頂きまでは約五分、まだ桂ちやん達は來て居ない。西黒の尾根を少し下ると眞先きに信ちやんの紫色の帽子が見えた。「ヤツホー」を叫ぶと四人の聲が異口同音に「ヤツホー」とかへつて來た。

（高橋記）

時間記錄　山ノ家　五・三〇　マチガ澤出合　六・〇〇　雪渓　六・四〇　尾根　一〇・〇〇　谷川頂上　一〇・〇七

参加者　石川、高橋。

第八回　武尊山縱走

係都合により中止

山岳部設立經過

體育會が成立して社内に山岳部設立の聲が漸く喧しくなつて來た時、私達は及ばずながら一臂の努力をする決心を致しました。そしてその努力を具體化する爲社内に於ける嶺慰會、テクロー會、山小屋會、スキー倶樂部の有志及山岳マニアーを選んで設立準備委員とし殆んど毎日の様に設立具體案の作成に努めやつとの事で體育會に公認されるに到りました。

準備委員

渡邊鐵次郎　草野嘉一　阿久澤文雄
菊谷晃　内田晃一郎　高橋重吉
石川勝正　伊澤桂三郎

昭和八年度末までの暫定役員は準備委員より互選とし次の如く決定しました。

總務部　草野嘉一
企劃部　渡邊鐵次郎
記錄部　阿久澤文雄
圖書部　伊澤桂三郎
器具部　高橋重吉
石川勝正

十二月六日地下室食堂に於て第一回部員總會を開催、出席者九〇名盛會裡に昭和九年度役員の選擧を行ひ次の如く決定しました。

總務部　草野嘉一
企劃部　阿久澤文雄
高橋重吉
記錄部　伊澤桂三郎
圖書部　渡邊安三
器具部　石川勝正

尚總務部役員は體育會委員を兼任します。

寫眞說明

氷河

田卷俊太郎

シヤモニー モンブランにて　アゲフア イゾクローム F 11 $\frac{1}{50}$
アグフアフイルター No. 3 使用

（一九三一・七・一二・正午）

列樹

山本清一

奥多摩、棚澤部落奥より大嶽山を望見。眞夏のある日。晴。午后四時半頃。
サクラクロームフイルム。ウルトラジン No 3 F 8 $\frac{1}{10}$

（一九三四・八・一二）

三峠の富士

村松瑛

富士の變化に富んだ姿を眺める爲に、又、その一日の移り行く光と色との階調の美しさを求むる爲に、三峠はこよなき場所である。

（一九三三・一〇・一七）

キヤムプ

草野嘉一

上高地小梨平より前穂高を望む。並び立つマツカンバ、シロカンバ、殘雪を頂く前穂高。
梓川の瀨の音、大自然の美は吾々の家に忍び込むで來る。

（一九三二・七・二七）

燈岳

村松新八郎

燈岳が沼の彼方にどつしりと座つてゐた。沼に注ぐ川に器具を洗ひに行つた時
松の大木が何とも云へぬ美くしい調和を尾瀨沼と共にしてゐた。

（一九三一・七・二八）

笠ケ岳

川野清一郎

横手山鞍部より笠ケ岳を望む。志賀高原の奥信州と上州との境に連なる山々は黑々とした針葉樹の原生林で一面に覆はれ、其森林の間には妖精の踊り場のやうなスロープが無數に展開してゐる。（一九三四・三・二五）

黄昏

伊澤桂三郎

生藤山より初まる奥高尾縱走中城山へ着いた時、
冬の陽は既に沒して芒の彼方に震えてる富士のシルエット

（一九三二・一・五）

百尋ノ瀧

今田敏男

石灰質の一枚岩の岩壁を水煙たてゝ滔々と深碧の瀧壺に落下する壯觀さ、
西多摩郡第一と謳はれるもむべなるかなとうなづかれる。

（一九三四・七・八）

乾德山

石川勝正

前夜の豪雨は名殘りなく晴れて爽やかな朝を大久保峠に迎えしとき、朝の陽は
乾德の嶺より溪へとおとずれて何とも言えぬなごやかな氣分を與へて呉れました。（一九三四・四・二二）

ヒユツテ

高橋重吉

三寶荒神山を背景にコーボルトヒユツテ。
夜中荒れた吹雪もどうやら鳴りを靜めた明け方。

（一九三四・四・二）

雲海

草野嘉一

絶間なく降り續ける雨を冒して白馬岳から黑部溪谷へと山旅を續けた時、雲海上に背だけを出し浮ぶ大蓮華小蓮華岳の和やかさに思はず足を止めざるを得なかつた。たなびく雲の柔かさに包まれた男々しい岳の靜かな一刻である。

（一九三一・七・二一）

藏書目錄　圖書部

地圖の讀み方		銀盤に畫く　小秋元隆邦
旅程と費用概算		わかりやすいスキー術
東京から一二泊の氣まゝな旅		山と溪谷　一、五、七—十、十二、十八、二十、二十二—二十七號
東京近郊日がへりの行樂		山小屋　一—三十號
東京近郊の山と溪	菅沼達太郎	登山とスキー　六—十、十二、十四、二十—二十九號
東京附近の山々		山　一—六號
東京附近山の旅		ハインキング　十、十七—二十六號
一日二日山の旅	河田楨	ケルン　六—十四號
奥秩父と其附近		山と旅　一〇一號
南アルプスと奥秩父		旅　八年十一、十二月
北アルプス	角田吉夫	登高行　一九二四、二五　慶應義塾山岳部
上越國境	田部重治	季刊「ハイカー」　丸善旅行會
峠と高原		燕　服部時計店
スキーの山旅	田部重治	東京市山岳部年報　東京市役所體育會
スキー・ツアー	菅沼達太郎	
スキー　指導及研究		
積雪期登山	藤田信道	

器具目錄　器具部

テント(三人用グランドシーツ付)	二張	コッフェル　五箇
〃　(四人用　〃　)	一張	アルコールタンク　三箇
〃　(五人用　〃　)	四枚	ズック製バケツ　三箇
グランドシーツ	二〇箇	鑵切　三箇
飯盒	六箇	鍋　一箇
ランタン	四箇	茶濾　三箇
ハイサック	五箇	ナイフ　一箇
水筒	四箇	シャモジ　一箇
地圖ケース	二箇	柄子　一箇
アイゼン(四ツ爪)	六箇	
輪カンヂキ	二箇	
鉈	一箇	
斧	四箇	
磁石	三箇	
角笛	二箇	
ローゴテ	二箇	
メタバラケース	三箇	
スキーシユビツツエ	一箇	
スキーレバラトール	三箇	
テルモス		

會計報告

自昭和八年十一月
至昭和九年六月

收入之部	
會費	一六八、三〇
次期繰越金	五〇、八〇
計	二一九、一〇
支出之部	
年報發行費	二〇八、〇〇
部報發行費	七、一〇
第一回部員總會茶菓費	四、〇〇
計	二一九、一〇

編輯後記

漸くのことで創刊號が出來上りました。六月發刊の豫定が大變遲れたことをお詫び致します。

どうでせうか　僕等はベストを盡した心算です。

夏中で仕上げるつもりが思ふ樣はかどらずその中、學校も初まり時間の合間〳〵に校正だの裝幀だのに追はれ登高とは亦異なつたアルバイトに相當疲れました。

然し表紙も本文もすつかり準備も出來て今はホッとした氣持です。それは滿ち足りた山行の歸途の心にも例へませうか。

創刊號として論說、研究の無かつた事は遺憾でした。それに編輯や裝幀にまだ〳〵研究しなければならないと思つてますそして次の年報はもつと素晴らしくすることを心掛けませう。

カットに就いて

詩欄の花はタカネスミレ(スミレ科)、一五三頁の花はウメバチサウ(ユキノシタ科)共に可憐な高山植物です。

紀行最初のカットは燕山莊より燕嶽頂上をスケッチしたものです。(K生)

昭和九年九月廿日印刷
昭和九年九月廿五日發行
(非賣品)

東京市世田ヶ谷區上馬町一ノ五七〇
編輯兼發行者　伊澤桂三郎
東京市京橋區京橋二丁目二番地
印刷者　石黑鶴喜
東京市京橋區京橋二丁目二番地
印刷所　大久印刷合資會社
東京市京橋區京橋二丁目二番地
發行所　千代田生命保險相互會社內
體育會山岳部

9.26

終